

# 認知症 早期段階が対象

東京都内に住む女性(75)は今年3月から2週間に1度、都健康長寿医療センターに通う。中央処置室のクリイニングシートに座り、約1時間かけてアルツハイマー病治療薬・レカネマブの点滴を受けている。アルツハイマー病は認知症の原因の一つ。認知症全体の6〜7割を占め、症状が表れる10〜20年前から脳内で異常なたんぱく質「アミロイドβ(Aβ)」が蓄積し神経細胞を傷つけることが分かっている。レカネマブはAβを取り除き、

認知機能が低下する速度を遅らせる効果が確認された初の薬。国内の医療現場では昨年12月から使われている。対象は認知症の前段階にあたる軽度認知障害(MCI)を含むアルツハイマー病の早期患者に限られている。

女性の異変に最初に気づいたのは夫(75)だった。2021年3月、家族旅行で切符を出すのに手間取る姿に、「今までこんなことはなかった」と戸惑った。少し前の出来事や経緯を明確に思い出せず、家の中で物

し物をするこも増えた。

女性は「年齢相応の物忘れかな。年には勝てないな」と思っていたが、その後、「将来に備えて2人で応募しないか」と夫に誘われ、22年春にレカネマブの治験に参加するため同センターで検査を受けた。脳内にAβが蓄積していることが疑われ、認知機能の低下もわずかにみられたため、MCIの状態と診断された。

だが、治験は無症状の人を対象としており参加できなかった。その後も定期的に通院していたが、レカネマブに公的医療保険が認められた後の24年1月、同センター脳神経内科医長の井原涼子さんに「症状が軽い人が対象の薬です。考えてみませんか」と勧められた。体重50kgの人が使用するこの薬の公定価格は年間298万円に上るが、女性が思い出したのは、アルツハ

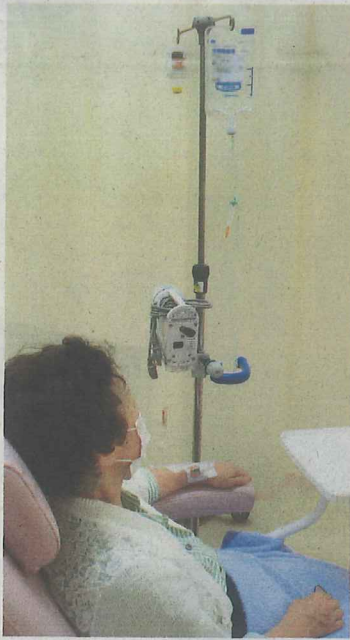
イマー型認知症を患い、93歳で亡くなった父の言葉だ。「病気が治る薬があれば、どれだけ値段が高くても使いたい」とこぼしていた。

「認知症を治したり、良くしたりする薬ではないと分かっている。でも、恩恵を受けられるならぜひ使ってみたい」。女性は高額療養費制度などで負担を軽減できるともあり決断した。

この薬は脳の浮腫や微小出血などの副作用が報告されている。女性も9月の検査で脳に小さな出血が見つかったが、支障がないと判断され治療を続けている。近所に住む孫の世話に張り合いを感じており、「今は日常生活にそれほど困っていない。この状態を長く維持したい」と話す。

レカネマブの登場でMCIの人にも治療の対象が広がった。認知症診療が転換点を迎える中、医療現場が直面する課題を探る。

(このシリーズは全6回)



レカネマブの点滴治療を受ける女性(画像は一部加工しています)